

特集

「楽しい

京都教育大学教授 森山卓郎

言葉の授業」への

ヒント

もり やま たく ろう
森山卓郎

1960 年京都府生まれ。大阪大学文学部助手、講師、京都教育大学助教授を経て、現職。専攻は日本語文法。日本語の奥にあるものとの見え方や、日本語でのコミュニケーションのあり方などを研究。著書に、『国語教育の新常識—これだけは教えたい国語力—』（共著・明治図書）、『コミュニケーションの日本語』（岩波書店）、『表現を味わうための日本語文法』（岩波書店）など多数。

学習指導要領が新しくなって、「言語事項」は「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」となりました。

「ア 伝統的な言語文化に関する事項」という事項が加わったわけですが、「言葉」の特徴やきまりに関する事項の重要性はますます高まっています。「言葉」そのものに対する理解は、新たに位置づけられた「伝統的な言語文化」はもちろん、あらゆる国語科の学習の基本となっているからです。

とりわけ、「言語活動の充実」というこ

とが強調されるようになってきているにもかかわらず、語彙力の不足、不十分な構文能力などが大きな問題となっています。この背景には、言葉と触れる絶対的な機会が

少なくなっていることもあるのではないのでしょうか。ちょっとした小話、小さなゲームも大切な学力の基礎となるのではないかと思います。いろいろな機会に、言葉のおもしろさ、奥深さ、（そして、怖さにも）触れさせていくことが必要でしょう。

今特集では、敬語編、語彙・文字編、文法編、というように三つのトピックに分

敬語編

すっきり整理、疑問も解消

【新しい分類】

これまで一般的だった「尊敬・謙譲・丁寧」という三分類に対して、平成十九年度文化審議会答申「敬語の指針」では、五分

類が提案されました。五分類という考え方が出てきた背景には、敬語に関する研究の進展があります。「尊敬」は「上げる」ことによる敬意、「謙譲」は「下げる」ことによる敬意、という考え方だったのですが、「丁寧語」の存在

を指摘する宮地裕博士の研究などで、敬語表現にはもう少し複雑なものがあることがわかってきたのです。

それではまず、三分類からおさらいしてみしましょう。

例えば、Xさんが、「Aという人物がBという人物に会う」ということを、聞き手に伝えるとします。さまざまな敬意の関係によって、表現はさまざまに変わります。例えば、

AさんがBにお会いになる。

たとえば、主語の「Aさん」が高く待遇されることになります。「お会いになる」のように主語を高めたり、「Aさんのお車」のように持ち主を高めるのが**尊敬語**です。主に元の動詞に「お」になる「られる」

AさんがBにお会いになる。

AがBさんにお会いする。

※大きく描かれた人物は、話し手が立てようとする人物を示す。

「お目にかかる」（「会う」の謙譲語）などの特別な言葉もあります。**尊敬語も謙譲語も話題に登場する人物に対する敬語で**、例えば独り言の中でも言うことができます（話題の登場人物への敬語なので**素材敬語**と呼ばれることもあります）。**丁寧語**は言うまでもなく、聞き手に対する敬語で、「です、ます、でございます」

を付けて表現しますが、個別の語もあります。「ご覧になる」「見る」「召し上がる」「食べる」「飲む」などです。おもしろいことに、例えば「いらつしやる」は、「行く」の尊敬語であると同時に、「来る」の尊敬語でもあります。例えば、「明日、先生がいらつしやる」という文を聞けば、「行くのか、来るのか、いるのか」という三通りの意味を考えないといけません。

一方、**謙譲語**の場合、

AがBさんにお会いする。

というように、動きの相手である「Bさん」が高く待遇されることになります。このBさんはAさんよりも高められています。が、同時に話し手よりも高い扱いになっています。

「お目にかかる」（「会う」の謙譲語）などの特別な言葉もあります。

特集

「楽しい言葉の授業」へのヒント

などです。これは独り言では使えず、聞き手への敬語です（**対者敬語**と呼ばれることもあります）。国語科の学習では最も早くから学習する敬語で、丁寧な言葉遣いの基本です。

丁寧語を使った文体を「敬体」、そうでない文体を「常体」と呼ぶこともあります。「会います」のように元の動詞に「ます」をそのままくっつけたり、名詞や形容詞などに「です」をつけたりします。

丁寧語は尊敬語や謙譲語と一緒に使われることもあります。それぞれ「AさんがBにお会いになります」「AがBさんにお会いします」のようになります。

この三分類に加えて、美化語、丁寧語（「謙譲語Ⅱ」とも）という敬語形式も含めた分類が五分類です。

美化語とは、言葉を美しく言うという機能だけがある表現で、

おふろに入ってから、お茶を飲む。

の「おふろ」や「お茶」のような表現です。光村図書の中学校の教科書では以前から取り上げられています（三年P32）。同じ「お」でも「Aさんのお車」というときには、相手の持ち物を高めて表現する尊

敬語となるのに対して、「おふろ」「お茶」は誰を尊敬しているのでもありません。「ふろ」「茶」と言えばやや乱暴に聞こえるのを「お」をつけてきれいな言葉遣いとして言っているのです。

きれいな言葉遣いということはすべての敬語に共通するのですが、いわばその特徴だけを持つているのが美化語だといえます。

丁寧語（謙譲語Ⅱ）とは、丁寧語と一緒に使われ、聞き手に対する敬意を表すものです。例えば、

私たちが連絡いたします。

などの「いたす」の部分がこれに当たります。基本的に「ます」と一緒に使われることに注意してください。

存じます（存ずる） 申します（申す）
参ります（参る） おります（おる）
などもそうです。

この丁寧語の注意点は、主語が一段下げた言い方になるということです。

お客様がいたしますか。

のように言う「お客様」を立てた表現にはならないので注意が必要です。「弊社」などもここに分類されます。

敬語Q&Aコーナー

Q 過剰敬語（二重敬語）とは？

A 「先生がお話しになられる」のような形です。「先生がお話しになる」に、さらに「られる」をつけた形になっています。

ただし、実際の受け取り方は少し違うようで、気にならない、という人もいます。

なお、「研究している」に対して、「研究なさっていらっしゃる」は、「研究する」「ている」のそれぞれが敬語になった形なので、少し重複感があるかもしれませんが、二重敬語ではありません。ちなみに、「研究なさっている」という「動詞（尊敬語）＋ている」と、「研究していらっしゃる」という「動詞＋ている（尊敬語）」という表現の両方がありますが、どちらも可能です（前者のほうがよく使われているようです）。

Q 「寒くない」の丁寧語には「寒くありません」と「寒くないです」の二つがある？

A どちらも正しい表現とされています。ただ、形容詞はもと「です」がつきにくいという背景があります。「寒いです」の「です」は「本です」の「です」とは働きが違うからです。

これは「です」を「だ」に変えてみるとわかります。「本です」は「本だ」になりますが、「寒いです」は「寒いだ」にはなりません。「寒いです」の「です」には丁寧にするという働きがなく、断定的意味はないのです。しかし、現在では、ほかに言いようもないので（「寒うございます」だと丁寧すぎます）、「寒いです」という表現は普通に使われています。

ただし、否定にする場合には、「寒くないです」のほかに、「ない＋丁寧」を「ありません」で表現できることから、「寒くありません」とも言えます。できるだけ「形容詞＋です」を避けるという点では「寒くありません」の方が洗練された表現になっているとも言えます。形容動詞の場合の、「好きではないです」と「好きではありません」も同じです。

Q 「おなら」の語源は？

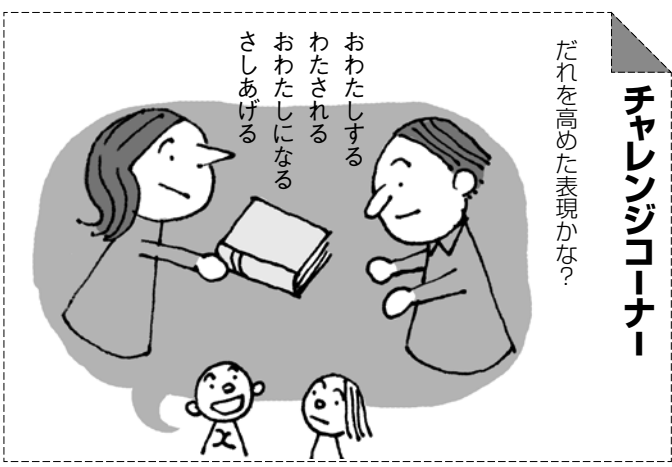
A 「おなら」の語源は「お＋鳴らし」だとされています。この「お」は、もとは言葉をきれいに言う「美化語」だったと考えられます。「おもちゃ」も「もちあそび」に「お」がついた美化語がもたっている

五分類	語	例	三分類
尊敬語	お（ご）になる、～なさる、～られる、お（ご）＋名詞		尊敬語
謙譲語Ⅰ	お（ご）～する、～申し上げる、～うかがう など		謙譲語
謙譲語Ⅱ（丁寧語）	いたす、存ずる、申す、おる など（「ます」と一緒に使う）		謙譲語
丁寧語	です、ます、でございます		丁寧語
美化語	お＋名詞		丁寧語

※美化語を三分類の丁寧語に含めない考え方もある。

■五種類の敬語を使った文

先生が大先生に
美化語 尊敬語 謙譲語 尊敬語 謙譲語 丁寧語 丁寧語
お茶と ご著書を差し上げられ たと うかがつて おり ます。



チャレンジコーナー

だれを高めた表現かな？

る言葉だと考えられています。ただ、現代語では、いずれも「お」の結びつきは強く、「お」を取り去った「なら」「もちゃ」では、意味をなしません。その点で、「おなら」の「お」や「おもちゃ」の「お」は、もはや敬語表現としての働きを付加しているというより、語の一部になってしまっていると言ったほうが適切です。

特集

「楽しい言葉の授業」へのヒント

漢字を 楽しもう

「春日はなぜ「カスガ」？」

漢字の訓読みとは日本語の「意味」による読み方です。訓読みには、熟字訓と言われるような、語としてまとまった特別な読み方のものもあります。例えば「土筆」は土から生えたところが筆のように見える植物です。それで「土筆」という漢字をあてますが、言葉はそのまま「つくし」と読むのです。「くらげ」を「海月」や「水母」と書くのも同様です。こうした例はクイズでもよく取り上げられています。

「時計」も「とけい」と読むのは熟字訓で、「計」は「けい」という音読みを持っています。が、「時」そのものは「と」とは読みません。意味がぴったりなので気づきににくいのですが、もとは「土圭」などと書いた言葉の熟字訓で、いわば漢字が入れ替わっているのです。「時計」を「とけい」と読むと教えられて、「じけい」と読

まないのはなぜか、何かしっくりこなかった、という子どもたちもあるかもしれません。が、その感覚は正しいと言えます。

さて、中には変わった背景をもった熟字訓もあります。例えば、「春日」は、「はるひ」が「かすか」にかかる枕詞というところからできた読み方とされています。春日はかすんでかすかになるからでしょうか。「春日」を「かすが」と読むところに、ちよつとした趣を感じます。「飛鳥」も同様。「飛ぶ鳥の」が「明日香（あすか）」という地名にかかる枕詞で、そこから「飛鳥」を「あすか」と読むようになっていったのです。

もともと古い日本語には字はありませんでした。日本語という言葉と漢字とのつきあい方にはいろいろな背景があり、それをたどることも楽しい学習になるかもしれません。



「惜しい」という意味でした。

「雰囲気」を「ふいんき」と言っている人ときどき見受けられますが、これは現在、まだ誤りの意識がある例ではないでしょうか。ただ、これから何十年か経つと、「ふいんき」の方が市民権をもつかもしれませんね。言葉の歴史にはいろいろな勘違いもあります。

「何」をなんと読む？

「何」という字ですが、「なに」とも「なん」とも読むことがあります。「何と言ふの」というとき、「なに」でも「なん」でも間違いではありません。しかし、「何時」「何円」「何軒」などという場合、「なに」と読むのは間違いです。数字が入る場合には「なん」としか読めないようです。例えば「何人」は「なに」と読むのか「なん」と読むのかで、意味が違います。「なにじん」だと国を聞くことになり、が、「なんにん」だと人数を聞くことになるからです。

このほか、「何てこった！」では「なん」、「何者だ」では「なに」というように、語による読み方の慣習的な違いもあります。

せん。

このような熟字訓、生徒たちに身近なものとして、次のような例があります。ゲーム感覚で楽しむことも、言葉や表記に対する意識を高めることにつながります。

【例】案山子、神楽、胡桃、木霊、河童、秋刀魚、松明、足袋、心太、土竜、浴衣、行方

「広く使われているけれど、 本来は「漢」違い？」

当たり前のことですが、「手へん」と「土へん」は違います。例えば「掘る」は前者、掘ってできた「堀」は後者です。しかし、「手へん」と「土へん」の混同が広く使われているということがあります。その例が「独壇場」。「投手交代で彼が投げようになつてからは、すっかり彼の独壇場で、たちまちゲームを制した」のように、「ある人が思いのままに活躍する」ということを表す言葉です。しかし、これは本来は「独擅場」。「ほしいます」という「擅」が、よく使われる「壇」に勘違いされたのです。一人で壇の上上がっている、というような解釈もできそうだからかもしれませんが。伝統的な言葉の使い方から考え

チャレンジコーナー

すきまの時間などに、漢字のゲームをしてみましょう。辞典を使って、知らない言葉や漢字と出会わせるのもいいですね。

どれだけ続けられるかな？

① 同じ読みを持つ漢字（漢語）を集めようゲーム

- 【かい】 界会回海解貝怪快戒壊…
- 【せん】 線千戦選船織泉銭先専…
- 【こうかん】 交換、高官、銅管、交歓、好感、向寒、公館、交感、校勘…
- 【せんこう】 選考、専攻、線香、潜行、閃光、専行、先攻、選鉱、戦功…

② 漢字しりとりゲーム

- ・留学→学習→習字→字体→体育→……
- ・入館制限→制限時間→時間短縮→……

③ 熟語クロスワードパズル

書籍や雑誌などの例を参考にしながら、クラスの実態に合わせて作ってみてください。作る楽しさ（苦しさ?）も味わえますよ。

文法教育の難所越え

「体言」と「用言」がわかると
文法がわかりやすくなる

「名詞」「動詞」などの言葉に比べ、「体言」「用言」という言葉は意味がわかりにくいのではないだろうか。個人的な話で恐縮ですが、私が中学生のとき「体言」と「用言」という言葉がよく理解できませんでした。

これには背景もあります。「名詞」「動詞」などの用語は西洋の文法を翻訳してきた用語です。英語などの外国語を学ぶ場合などに「名詞」「動詞」という言葉はよく耳にします。一方、「体言」「用言」は古くからの日本の言葉です。華道などでも「体」「用」のような言葉が使われることもあり触れない言葉です。

しかし、「体言」「用言」は、主語にな

るか述語になるかという考え方ですから、文の構造にも関わっています。

また、当然、体言、用言、それ以外の言葉、というようにまとめていくと、これは品詞の理解にも役立ちます。さらに、「連体形」「連用形」という形があるように、「体言」「用言」ということは、活用形の学習にも関連しています。このように、体言と用言という概念が理解できれば、学習の大きなポイントが理解できるようになるのです。

では具体的に見ていきましょう。
まず、体言とは名詞のこと。主語になれる言葉として特別扱いされています。形の上では「が」「の」という形になるなら体言、すなわち名詞だと一応言えます。主語になるだけでなく、助動詞の「だ」「です」をくっつけると、名詞も述語になります。用言とはそれだけで述語になれる言葉のことです。品詞としては三つの種類があります。簡単にまとめると次のようになります。

■ 動詞

歩く、走る、する、着る、消える…

言い終わりは「ウ」段の音。

■ 形容詞

白い、明るい、楽しい…

言い終わりは「い」。「く」とい

う形にもなる。

■ 形容動詞

きれいだ、変だ、奇妙だ…

言い終わりは「だ」、次に名詞がくれば「な」となる。

ちなみに、現代語では動詞の言い切りは「ウ」段の音ですが、古典語では違います。例えば「あり」というように終止形がイ段の音のものもあります。

体言と用言とは、主語・述語の関係にかかわる概念です。さらに、ここから連体修飾と連用修飾という関係づけがポイントになります。

● 連体修飾

「体言」に「連なる」、つまり名詞を修飾すること。

白い+雪、歩く+人、変な+服装

● 連用修飾

「用言」に「連なる」、つまり述語を修飾すること。

さつさと↓歩く、ずいぶん↓歩く、たぶん↓歩く、ごはんを↓食べる

ここでの「修飾」という概念は実は難しいのですが、素朴に、どの言葉に関連しているか、つながっていくか、という関係で考えるとわかりやすいかもしれません。日本語では言葉のつながり方によって形が変

チャレンジコーナー

次は西村府子先生（京都教育大学大学院生・京都市立陶化中学校教諭）の提案例をもとに考えたもので、表現技巧にも関連します。

▼唱歌「とんび」を例にした活用の学習

一、飛べ飛べとんび空高く

鳴け鳴けとんび青空に（以下略）

二、飛ぶ飛ぶとんび空高く

鳴く鳴くとんび青空に（以下略）

この歌詞は、一番では、「飛べ」「鳴け」と命令形になっています。こちらは、生徒たちもすぐに「命令形」であることや文の意味もわかるでしょう。

一番では「飛ぶ」「鳴く」と連体形ないし終止形になっています。この部分の意味と活用について生徒たちに考えさせます。

連体形だと「空高く」の後は省略されていることになり、「飛んでいるとんび」という名詞終わりの表現になります。

終止形だと「空高く」は「飛ぶ」を倒置して修飾する形と考えられるでしょう。

このように、標語、歌、広告「ピー」などの身の回りの表現から文法を考えるのもおもしろいですね。ふだんから気になる表現などメモしておいて、生徒たちと一緒に楽しみください。

★先生を困らせる文法の例外

文法には様々な例外もあるというのが事実です。例えば「同じだ」は「変だ」とよく似ていて形容動詞のようにも見えますが、「同じな」という連体形がなかったり、「同じく」というまるで形容詞のような形があったりします（古くは「同じい」という形もありました）。

活用する（述語でいろいろな使われ方がある）

付属語 助動詞

自立語 動詞（ウ段）
形容詞（い）
形容動詞（だ／な）

用言＝述語になる

活用しない 助詞

名詞（が／の）体言＝主語になる

連体詞＝連体修飾

副詞＝連用修飾

接続詞＝接続関係

感動詞＝独立して使う